

5 乳腺ラジオ波焼灼療法時に得られた細胞像

○村田行則 川村公彦 岡野行宏 岩崎聖二 橋本洋二 杉澤頼昭 和田徳昭 井本滋 長谷部孝裕 (国立がんセンター東病院)

【目的】ラジオ波焼灼療法(Radiofrequency Ablation, 以下 RFA)はラジオ波によって発生する高熱により病変部を凝固壊死させる治療であり、肝腫瘍に対する RFA は現在すでに日常診療で広く実施されている。しかし、乳腺腫瘍に対する RFA の報告は少なく、今回我々は、乳腺 RFA 時に得られた乳腺腫瘍部の細胞像について報告する。

【方法】検体は乳腺腫瘍に対して RFA が施行され、焼灼後に摘出された腫瘍部の捺印標本である。

【結果】細胞像：壊死物質を背景に、不規則な配列で重積性集塊を形成する異型細胞を認めた。細胞は、変性のためか高円柱状で N/C 比は高く、クロマチンは多くの核で濃染していた。

肉眼像：腫瘍は黒褐色調を帯びた成分と灰白色調の成分とからなり、黒く炭化した腫瘍成分もみられた。

組織像：腫瘍全体がラジオ波焼灼により変性し、腫瘍細胞の胞体の好酸性は増していた。

【まとめ】細胞像では壊死物質、熱変性した細胞の出現がみられた。焼灼治療後の評価のため、今後症例を集積し、より詳細な細胞学的な検討が必要であると思われた。

04-7133-1111(内 2385)

6 穿刺吸引細胞診における報告様式について—当院の運用—

○諏訪朋子 加藤 拓 高橋久雄 徳泉美幸 安藤智子 及川友身 井田喜博 (船橋市立医療センター検査科)

【はじめに】乳癌取扱い規約(第 15 版 2004 年 6 月)や甲状腺癌取扱い規約(第 6 版 2005 年 9 月)などにおいて細胞診の新たな報告様式が提唱され、今後各施設での運用が期待されている。それを踏まえ当院での運用を報告する。

【材料と方法】当院での乳腺、甲状腺および唾液腺などの穿刺吸引細胞診のほとんどはコンピュータ入力により印字し臨床側へ報告している。

【結果】記入項目は 1. 採取部位、2. 細胞所見、3. 推定病変、4. 臨床へのコメント、5. Class 分類、6. 報告日、7. サインなどからなる。

【まとめ】取扱い規約では判定区分を明確にすることからなっている。その内容は検体が適正か不適正か。適正であれば正常あるいは良性、鑑別困難、悪性疑い、悪性に区分される。Class 分類は必要ないとの意見もあるが、当院ではおもに Class1: 正常細胞、2: 良性腫瘍、3: 判定困難、4: 悪性疑い、5: 悪性、記載無: 不適正とし、判定区分の役割とのちのデータ整理のため、また臨床側の客観的な判断のために現在使用している。

047-438-3321